

平成22年 5月 21日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19320099

研究課題名（和文） 新発見資料を中心とした日韓の文化交流史の研究

研究課題名（英文） A study of the history of Japan-Korea cultural exchange mainly on the new discovery materials

研究代表者

熊谷 公男 (KUMAGAI KIMIO)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：70153343

研究成果の概要（和文）：

近年、日本・韓国で発見された資料を現地に行き、実見・調査し、それを積極的に活用した研究を行った。具体的には、(1) 韓国全羅南道で10数基発見されている前方後円墳の歴史的意義を解明するために、6世紀の日本と韓国の交流史について研究を行い、成果を公刊した。また(2) 2007年に韓国扶餘で発見された王興寺塔跡とその出土遺物についての研究をとおして、6～7世紀の東アジアに仏教およびその関連技術等について、その伝播・受容について、具体的に解明した。

研究成果の概要（英文）：

In late years we performed materials discovered in Japan / Korea at the spot and watched and investigated those and performed the study that utilized those positively. Specifically, (1) we studied history of Japan and Korea interchange in the sixth century to elucidate significance of the history of a ancient Japanese tomb of a circular shape with a rectangular frontage discovered 10 several engines in Jeonra Nam Do of Korea and published result. In addition, (2) we performed the tower trace of Okoji-temple discovered in Puyo of Korea in 2007 and the study about the exhumation remains and elucidated the spread about Buddhism and the associated technique concretely in the East Asia in 6-7 centuries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2008年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2009年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
年度			
総計	10,100,000	3,030,000	13,130,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：前方後円墳、寺院跡、王興寺、飛鳥寺、栄山江流域、百濟、倭国

1. 研究開始当初の背景

| 近年、日本、あるいは韓国で、両国の古代

の盛んな国際交流を示す遺跡・遺物の発見が相つぎ、その意義づけをめぐって議論が盛んになりつつあり、古代史像の再検討の気運が高まりつつあった。

2. 研究の目的

日ごろ、日韓の文化・歴史に関心をもち、共同研究を行ってきた東北学院大学の古代史・考古学・民俗学の教員に、日本古代の対外関係史を研究し、多くの業績をあげてきた古代史研究者2名と、朝鮮考古学、とくに百濟考古学を専攻し、古代日韓交流史についても研究を進めている考古学者1名を加え、近年発見され、まだ十分に検討が尽くされていない重要な資料を主な素材としながら、日韓交流史を新たな視点からとらえ直すとするものである。

具体的には、(1)近年、全羅南道梁山江流域で10数基が発見され、議論をよんでいる前方後円墳と、(2)韓国全羅北道益山の弥勒寺跡と慶尚北道慶州の新羅皇龍寺跡、および奈良県桜井市の吉備池廃寺(百濟大寺)で相ついで発見され、東アジア諸国間で比較研究がようやく可能になった大型木塔(九重塔)跡、(3)2007年夏の発掘調査で明らかになった韓国忠清南道扶余の百濟王興寺の木塔跡、およびその心礎舍利孔から発見された577年の銘文がある青銅製舍利函の3つの新発見資料を主な対象として共同研究を進め、当該時期の東アジアにおける国際交流と仏教の弘通について共同研究を進めることを目的とした。

3. 研究の方法

新発見資料を主要な研究対象とする共同研究なので、韓国・中国・日本国内における現地調査・資料収集を中心とする。具体的には韓国扶餘の定林寺・王興寺、益山の弥勒寺・帝釈寺、慶州の皇龍寺等の寺院跡、全羅南道の伏岩里古墳群・潘南古墳群、およびその周辺の光州月桂洞古墳・海南長鼓山古墳等の前方後円墳の現地調査、出土遺物の調査等を行う。さらにそれに関連して日本国内で日韓交流史に関係する遺跡・遺物の調査を行い、さらに中国でも、日中・中韓交流に関係する遺跡・遺物の調査を行う。

つぎに、これらの新出資料の歴史的意義を解明するために6～7世紀の日韓の関連する遺跡・遺物に関する資料収集と、文献史料の収集を行い、分析をすすめる。

4. 研究成果

本研究の成果としては、大きく2つあげられる。1つは、韓国の梁山江流域に存在する前方後円墳の歴史的意義についてであり、もう1つは、韓国古代史の最新の成果である王興寺と日本の飛鳥仏教との関係についてである。

まず1つ目については、平成19年10月に東北学院大学で研究分担者の辻秀人、研究代

表者の熊谷が中心となって国際シンポジウム「百濟と倭国を考える―地域社会と交流―」を開き、その成果を辻秀人編『百濟と倭国』(高志書院、2008年)としてまとめた。このシンポジウムは、6世紀を中心とした百濟と倭国の国際交流の具体相について、日韓の古代史・考古学両分野の研究者が学問的立場や歴史観の違いをこえて討議し、意見の一致はみなかったとはいえ、新しい歴史像の構築へ向けて大きな成果を収めた。その中で、本研究参加者の報告を簡単にまとめると、辻秀人「倭国周縁域と大和王権」では倭王権の周縁域にあたる東北地方と九州地方の王権との関係を比較し、百濟王権とその周縁域にあたる梁山江流域との関係を考えるためのモデルを提示した。熊谷「金官国滅亡をめぐる国際関係」は、6世紀半ばの金官国滅亡直後の国際関係を倭国・百濟・新羅・加耶諸国(とくに「任那日本府」がおかれた安羅国)等の諸国それぞれの主体的な外交政策を跡づけることによって描き出し、この段階における国際関係のあり方を明確にしようとした。連携研究者田中史生「六世紀の倭・百濟関係と渡来人」は、今来才伎と五経博士を6世紀における倭国の百濟支援への見返りとして渡来したととらえ、渡来後も百濟本国の外交戦略を継続的に倭王権に訴えかける任務を負っていたという問題を提起している。同山本孝文「考古学から見た百濟後期の文化変動と社会」は、熊津期から泗泚期にかけての百濟社会の動向を都城・古墳・装身具・土器を素材として検討し、熊津期の在地首長層が泗泚期には百濟官僚に組織され、百濟領域内の人民をすべて百濟に帰属させる支配体制が構築されたことを明らかにする。

2つ目の研究成果としては、2008年11月に東京の國學院大学で開催された国際シンポジウム「古代文化の源流を探る―百濟王興寺から飛鳥寺へ―」に、本共同研究のメンバーのうち、分担研究者の佐川正敏と連携研究者の田中史生・山本孝文が参加して研究成果を報告し、それが2010年3月に、鈴木靖民編『古代東アジアの仏教と王権―王興寺から飛鳥寺へ―』(勉誠出版)として刊行された。そのなかで佐川「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔心礎設置・舍利奉安形式の系譜」は、中国・韓国・日本での6～7世紀の木塔跡の調査成果の広い知見にもとづいて、東アジアにおける伽藍配置・木塔心礎設置・舍利奉安形式の系譜をたどり、その中に王興寺と飛鳥寺を位置づけた研究で、今後の研究の基礎となる成果とすることができる。山本「百濟古墳の副葬品と王興寺舍利莊嚴具」は、王興寺出土の舍利莊嚴具のなかの帯金具等の官服の服飾品と官帽の鉄芯に着目し、これを王子の供養品とする理解を提示して、舍利莊嚴具に新たな意味づけを試みる。また田中「飛鳥

寺建立と渡来工人・僧侶たち—倭国における技能伝習の新局面—は、仏師の鞍作氏の技能伝習のあり方に光を当て、それが従来の氏族単位の世襲的な技能伝承と異なり、寺院を場とした「師—生」関係の新しい伝習方式を生み出したことを指摘し、日韓交流の中で新しい歴史事象が生起したことを明らかにしている。

このような成果をはじめ、本共同研究は韓国・中国等の新発見資料を積極的に活用する研究に取り組み、多くの成果を生み出した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ①山本孝文、百済古墳の副葬品と王興寺舍利荘嚴具、『古代東アジアの仏教と王権—王興寺から飛鳥寺へ—』(勉誠出版)、査読無、2010、pp. 137-157
- ②田中史生、飛鳥寺建立と渡来人・僧侶たち—倭国における技能伝習の新局面—、『古代東アジアの仏教と王権—王興寺から飛鳥寺へ—』(勉誠出版)、査読無、2010年、pp. 339-352
- ③佐川正敏、王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔心礎配置・舍利奉安形式の系譜、『古代東アジアの仏教と王権—王興寺から飛鳥寺へ—』(勉誠出版)、査読無、2010年、pp. 159-201
- ④佐川正敏、東アジアにおける仙台市与兵沼窯跡の位置づけ、アジア文化史研究、査読無、9号、2009年、pp. 1-19
- ⑤山本孝文、考古学から見た百済後期の文化変動と社会、辻秀人編『百済と倭国』(高志書院) 査読無、2008年、pp. 37-66
- ⑥田中史生、六世紀の倭・百済関係と渡来人、辻秀人編『百済と倭国』(高志書院)、査読無、2008年、pp. 159-174
- ⑦辻秀人、倭国周辺域と大和王権、辻秀人編『百済と倭国』(高志書院)、査読無、2008年、pp. 93-114
- ⑧熊谷公男、金官国の滅亡をめぐる国際関係、辻秀人編『百済と倭国』(高志書院)、査読無、2008年、pp. 201-233
- ⑨佐川正敏、古代日本と百済の木塔基壇の構築技術、および舍利容器・荘嚴具の安置形式の比較検討、『扶餘王興寺址出土舍利容器の意味』、査読無、2007年、pp. 61-113
- ⑩熊谷公男、五・六世紀の日韓交流と筑紫、市史研究ふくおか、査読無、3号、2007年、pp. 2-11

[学会発表] (計5件)

- ①山本孝文、百済泗沘城の空間構造と首都機能、国際シンポジウム 東アジアの6~7世紀の宮都を探る、2010. 3. 20、東北学院大学
- ②山本孝文、韓国考古学における古代国家論、

第21回東アジア古代史・考古学研究会交流会、2009. 12. 6

③熊谷公男、近年の古代史研究の論点国立歴史民俗博物館共同研究第1研究会、2009. 6. 21、国立歴史民俗博物館

④佐川正敏、王興寺と飛鳥寺の木塔基壇と舍利容器・荘嚴具の系譜、国際シンポジウム：古代文化の源流を探る—百済王興寺から飛鳥寺へ—、2008. 11. 16、國學院大學

⑤山本孝文、葬墓制度の定着過程、韓国考古学会、2008. 5. 31、韓国・西江大学校

[図書] (計1件)

①田中史生、筑摩書房、『越境の古代史—倭と日本をめぐるアジアネットワーク』(ちくま新書)、2009年、総頁245頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊谷 公男 (KUMAGAI KIMIO)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号：70153343

(2) 研究分担者

辻 秀人 (TSUJI HIDETO)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号：30244966
佐川 正敏 (SAGAWA MASATOSHI)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号：40170625
政岡 伸洋 (MASAOKA NOBUHIRO)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号：60352085

(3) 連携研究者

酒寄 雅志 (SAKAYORI MASASHI)
國學院大學栃木短期大学・日本史学科・教授
研究者番号：90187055
田中 史生 (TANAKA FUMIO)
関東学院大学・経済学部・教授
研究者番号：50308318
山本 孝文 (YAMAMOTO TAKAFUMI)
日本大学・文理学部・准教授
研究者番号：40508735